

古事談における希望表現について

柴田昭二
連仲友

目次

- 一、はじめに
- 二、希望表現の構成形式
- 三、各形式の用法
- 四、おわりに

一、はじめに

本稿は、別稿^①を受け、古事談を研究資料として、それにおける希望表現^②の実態を説明しようとするものである。

古事談は、源顕兼(永暦元年(一一六〇)～建保三年(一一二五))によって撰せられた説話集である。その成立の上限は建暦二年(一一二二)九月、下限は建保三年(一一二五)二月と思われる^③、鎌倉時代初頭期に数多く纏められた説話集の一つといえる。全巻は王道后宮・臣節・僧行・勇士・神社仏寺の五巻より成る。

ここで特に注目したいことは、この古事談の文献的特徴である。すでに益田勝実が「抄録の文芸」^④と見抜いているように、古事談は撰者源顕兼が自身の文体を用いて創作したものではなく、当時既に存在していた、

古事談における希望表現について

江談抄、中外抄、富家語、小右記などの文献から説話や記録を抄出集録することにより作成された説話集である。したがって引用された部分の用語あるいは表記については引用元のままであるものが多い事が考えられる。

以下に、古事談における説話とその出典元との比較例を幾つか並べて見る。

古事談

延喜聖主、臨時奉幣之日、出御南殿、本自有風、抱簡差欲^レ拝之間、風弥猛、御屏風殆可顛倒、(二八頁 一一八)

江談抄^⑤

延喜聖主、臨時奉幣之日、出御南殿。先是有風氣。把笏着靴、欲^レ奉拝之間、風弥猛、御屏風殆可顛倒。(四七八頁 一一一九)

この例では、江談抄(一一〇四―一一〇八成立)をほぼ引用しながらも、細部の描写に異なりが見られる。

古事談

成典下地礼拝シテ、昇座申云、欲奉礼大師尊兒之志、已及多年、而去夜夢ニ欲奉礼大師ハ可見仁海之由有其告、仍所參入也云云、
(三二八頁 三一六九)

中外抄

成典下地て再拜して昇座て申云、大師尊貌を欲奉礼之心已及多年。而去夜夢欲奉礼大師は、可見仁海之由、有其告。仍所參入也云々、
(五五一頁 上・二二)

この例では、中外抄(一一三七一―二五四成立)とほぼ同文にしながら、古事談の文体・表記を統一する意図が窺われるように思われる。

古事談

後朱雀院御即位、内弁ニテ大二条殿ネラセ給ケルヲ、宇治殿大極殿ノ辰巳ノ角壇上ニテ御ランシテ、アハレ狛人ニミセハヤト被仰ケリ、
(六七頁 一―四八)

富家語

後朱雀院御即位日、大二条殿内弁ニテ如法ニ令練給ケリ。玉冠玉佩火打ノ様ナル物トモノ、チ、リウくト鳴ホトニ令練給ケルヲ、宇治殿大極殿辰巳角壇上ニ御覧シテ、アレハ狛人ニミセハヤト被仰ケリ。
(五七七頁 五六)

この例からは、富家語(一一五一―一六一成立)の文から要点を抄出し、古事談の一説話としての纏まりを意図しているように思われる。

以上の比較例から見られるように、引用の態度は概ね「抄録」というべきものであり、希望表現に限っていえば、古事談と出典元の希望表現は質的な差がないといつてよいと思われる。これらの原典はジャンルとして古記録・説話集・軍記物語など多彩であるが、古事談の文体は大旨漢字表記の和化漢文に漢字片仮名混じり表記の和漢混淆文を交えたもの

となつている。

したがって如何に訓読されるべきかに拘わらず、原文を直接に分析する必要がある。このような性格を持つ古事談における希望表現の実態の解明はこの時代の資料としての意義があると思われる。

テキストには、岩波書店新日本古典文学大系41『古事談』(川端善明・荒木浩校注⁶⁾)を用いる。

二、希望表現の構成形式

まず、古事談における希望表現の構成状況、即ち、その希望表現は具体的に如何なるもので成立しているかを鳥瞰しよう。

- 「欲」 (四一例)
- 「願」 (三一例)
- 「望」 (二七例)
- 「祈」 (五〇例)
- 「乞」 (一四例)
- 「請」 (二六例)
- 「求」 (九例)
- 「詔」 (三例)
- 「庶幾」 (一例)
- 「くムト思フ」 (九例)
- 「バヤ」 (一二例)
- 「マホシ」 (一例)

以上の希望表現の構成形式を分類すれば、大きく三つの群に分けられるだろう。即ち、「欲」「願」などの漢字形式、「くムト思フ」という漢字片仮名交じり表記の和漢混淆文形式及び終助詞「バヤ」と助動詞「マ

ホシ」の和文形式である。そのうちで量的には漢字形式の用例数が圧倒的に多い。

言うまでもなく、希望表現の構成形式は文章の文体と直接関係がある。即ち、漢文体の文章には「欲」や「願」などの漢字形式、和文体の文章には「バヤ」や「マホシ」などの和文形式が多く用いられる。先述したように、古事談の文体はその抄出元の原典との関係で、基本的には漢字表記の和化漢文と漢字片仮名交じりの和漢混濁文であり、古事談における希望表現の構成形式が主に漢字形式であることはごく自然な結果であるといえる。

三、各形式の用法

(一) 漢字形式の用法

1、「欲」の用法

古事談には数多くの「欲」の用例が見られる。そのうち、「於海中船欲沈」(六一九 五一九頁)のような、「海に船が沈もうとする」という意味、いわゆる「将然」を表すものが約一五例見られるが、希望表現と関係がないため考察から除外する。

希望表現を表す「欲」の用例は四一例見られる。そのうち、名詞用法、助動詞用法は見られるが、「我欲仁斯仁至矣」(論語)のような、「欲」が直接述語になる「〜を欲する」の意を表す実動詞用法は見られない。

①名詞用法

- (1) 見此女房発欲心、忽病二成、(二二九頁 二一九二)

古事談における希望表現について

- (2) 五塵六欲之風ハ不吹トモ、随縁真如之波タ、ヌトキナシト云云
(三六一頁 三一九五)

例(1)における「欲心」は、男女の愛欲の意を表す。例(2)における「五塵六欲」は仏教用語で、「五塵」は色・声・香・味・触の感覚的な欲望、「六欲」は色・形貌・威儀・言語・細滑(膚の滑らかさ)・人相に関わる欲望を表す。この二例における「欲心」「六欲」は広い意味の希望表現であるが、希望を名詞表現したものと見えよう。

②助動詞用法

- (3) 若欲見再逢之期、莫開玉匣之緘(二〇頁 一一二)
(4) 仍左府愁嘆欲出家(一三九頁 二一一二)

例(3)は「もし再会の期を見たいのなら玉匣の緘を開けるな」の意、例(4)は「左府は愁嘆して出家したいと思った」の意である。この二例における「欲」はいずれも実動詞の前に位置する、いわゆる助動詞用法である。助動詞用法は希望表現の下位分類の「願望」と「希求」および「表出」と「説明」に分けられるが、古事談における三九例の助動詞用法の「欲」はすべて「願望」を「説明」する用法に当たる。

2、「願」の用法

古事談における「願」は三二例あり、すべて希望表現である。その用法には名詞用法、実動詞用法、助動詞が見られる。

①名詞用法

- (5) 我願既満 (三三頁 一一二〇)
 (6) 只有發願之心、全無造仏之力 (四七二頁 五十二七)

右の二例で示されたように、古事談における「願」の名詞用法はほとんど仏教関係の用例である。しかも、「発願」「立願」「満願」「宿願」「御願」「本願」「宿願」「咒願」といった熟語化されたものが数多い。これらの「願」は希望表現の名詞化したものであることは先述した「欲」と同様であるが、更に範囲が限定されて仏教用語に特化した希望表現である。

②実動詞用法

- (7) 所願並慕談話無変 (二二二頁 二一八五)
 (8) 僧賀上人為書写止観、美紙ヲ被願ケリ (三五四頁 三一九一)

例(7)の「所願」は「願ふ所はくである」の意で、話し手自身の「願望」を直接「表出」する用法である。この場合、「願」だけを見れば実動詞であるが、「所願」を一つの熟語と見なせばむしろ「願はくは」と同様な働きを持つ。それに対して例(8)の「美紙ヲ被願ケリ」は内心の希望ではなく、「良い紙をご依頼なさった」という具体的行動を表すものと解釈することができる。

③助動詞用法

- (9) 宜向蓬萊宮、將遂曩時之志、願合眼、(一〇頁 一一三)
 (10) 願上人加助成、必垂哀愍給云云 (三五八頁 三一九三)

例(9)は、「目を合わせてほしい」の意、例(10)は「助成を加え、哀愍を垂れてほしい」の意に解され、いずれも相手に「くしてほしい」

という意に解され、「希求」を直接「表出」するものである。

3、「望」の用法

古事談に希望表現を表す「望」の用例は一七例見られる。その用法は名詞用法と実動詞用法で、助動詞用法は見られない。

①名詞用法

- (10) 我往生極樂之望決定可果遂 (四〇八頁 四一六)
 (11) 是以觀修僧正為成就所望 (四〇頁 一一二七)

例(10)は「極樂往生の望みは必ず果たす」の意で、古事談における「望」の名詞用法はほとんど「く之望」の定型を取っている。例(11)は「所望を成就する」の意で、「所望」は「望む所」の熟語化した名詞用法である。

②実動詞用法

- (12) 件僧望内供奉十禪師、(二七八頁 二一五〇)
 (13) 春除目望申播磨国 (四〇頁 一一二七)
 (14) 競望参議之時 (一二七頁 二一二)

例(12)は「この僧は内供奉十禪師(という役職)を望んでいる」の意、例(13)は「播磨国を望み申しあげる」の意、例(14)は「参議を競い望む時」の意に解され、いずれも基本的には「くを望む」という動詞の用例である。

4、「祈」の用法

古事談に「祈」は五〇例見られるが、その用法は名詞用法と実動詞用法であり、助動詞用法は見られない。

①名詞用法

(14) 静真阿闍梨讚岐守ナリケル人之祈シテ相伴下向任国之間、

(二九四頁 三一三六)

例(14)は「静真阿闍梨は讚岐守であった人の祈りをして」の意で、この「祈」は名詞用法である。

(15) 祈雨之時、於件社頭有読経等事云云、(四六六頁 五一二四)

(16) 為御祈祷欲勤行臨時御神楽、(五四四頁 六一二八)

例(15)は「祈雨の時」の意、例(16)は「ご祈祷のため」の意で、「祈雨」「祈祷」は既に熟語化された名詞用法である。そもそも、このような熟語形式はいわゆる動名詞とサ変動詞の二重性格を持つので、名詞ととるか動詞ととるかは具体的な文脈において判断しなければならないが、ここでは二例ともに名詞用法と見なす。

②実動詞用法

(17) 屢祈之間、湧雲中現神龍之兒 (二七五頁 三一二一)

例(17)は「しばらく祈る間に」の意で、「祈る」という具体的な行動を表す。

古事談における希望表現について

(18) 親王暫以祈念、遊魂更帰死人蘇生云云、三〇四頁 三一四七)

(19) 多年祈請之(四五四頁 五一二二)

例(18)は「親王はしばらく祈念して」の意、例(19)は「長年これを祈請する」の意で、熟語形式で具体的な動作・行動を表す。

右の例(14-19)から見られるように、「祈」は単独で用いるより、「祈雨」「祈祷」「祈念」「祈請」などの熟語形式が主であり、特に「祈請」の用例は一九例にのぼる。

5、「乞」の用法

古事談に「乞」は一四例見られ、すべて実動詞用法である。

(20) 魚味ヲ乞テ令勸之云云 (三三〇頁 三一六三)

(21) 再三遣妻女於国司館、乞請サセケリ、(四二二頁 四一二五)

(22) 乞寄硯紙等書之也 (三三二頁 三一七三)

例(20)は「魚味を乞う」の意で、直接目的語の対象物を乞うことを表す用法である。例(21)(22)の「乞請」「乞寄」は熟語化された実動詞用法である。

6、「請」の用法

「請」は先述した「祈」「乞」と併せて二字熟語「祈請」「乞請」の形での用法以外に単独で用いる例が一六例見られ、すべて実動詞用法である。

- (23) 母堂夢中無止聖人來、請宿於腹中、(三七七頁 三一〇六)
- (24) 請名德之僧、數日加持之(四七四頁 五一二八)

例(23)は「腹の中に宿ることを願う」の意で、希望表現であるが、例(24)は「明徳の僧を招く」の意で動作を表し、希望表現ではない。

7、「求」の用法

古事談に「求」は九例見られ、すべて実動詞用法である。

- (25) 勝範奉仰之後山上求之、(三二九頁 三一六二)
- (26) 願求仏法耳(四六八頁 五一二五)

例(25)「勝範は仰せを奉じた後、山上にこれを求めた」の意、例(26)は熟語形式で「仏法を願い求める」の意を表し、いずれも「求める」という動作・行動を表す実動詞用法である。

8、「詔」の用法

古事談に「詔」は三例見られ、すべて実動詞用法である。

- (27) 洗濯ナト詔侍カ、不慮懷妊事候、(三七三頁 三一〇四)
- (28) 令詔書之輩多侍也(五〇三頁 五一五二)

例(27)は「洗濯などを詔えるが」の意、例(28)は「詔え書かせる」の意であるが、「詔える」という動作・行動を表す実動詞用法である。

9、「庶幾」の用法

古事談に「庶幾」は一例見られ、実動詞用法である。

- (29) 納言曰、所庶幾也、但何様ニシテ可到哉、(二二四頁 二一七八)

例(29)は「願うところだ。しかし、どのようにして到達できるか」の意で、「庶幾する」「願う」という動作・行動を表す実動詞用法である。

(二)和漢混淆文形式「ムト思フ」の用法

古事談に希望表現を表す「ムト思フ」及びその敬語形式は九例見られる。

これまで考察してきた「欲」「願」などの漢字形式はごく個別な例外を除けば、ほとんど漢字だけの表記で漢文の語順で用いられ、いわゆる和化漢文における用法である。このような和化漢文における漢字の読み方と意味は漢文の基本法則に依存している。しかし、「ムト思フ」は日本語の語順で漢字と片仮名交じりの表記を取る、いわゆる漢文訓読文より生じた和漢混淆文調の用法といえよう。

- (30) 家長ハ此恩イカニシテ報セムト思ケレト、(二二二頁 一一八九)
- (31) 勇猛強盛之心、昔衣河ノ館ヲオトサムト思シ時ニ不違云云、(四〇八頁 四一一六)

例(30)は「この恩をどうにかして報いたいと願うけれど」の意、例(31)は「勇猛強盛の心は、昔、衣河の館を落とそうと思った時と変わらない」の意と解され、「欲」の訓読形「ムト欲フ」と同型で意味もほとんど同じである。但し、すでに先の考察で分かるように、古事談に

における「欲」は和化漢文脈の漢字表記であるのに対して、この二例は日本語の語順になっている。意味的には、「願望」を「説明」するものである。

(32) 宇治殿関白ヲハ直京極殿ニ奉讓トヲホシテ、上東門院ニモ其由令申給ケレハ、(一九六頁 二一六一)

(33) 天皇聞食此事後、大伽藍ヲ建立セムト思食立ケリ、(二四五頁 三一三)

例(32)は「宇治殿は関白を直に京極殿に譲ろうとお思いになって」の意、例(33)は「天皇は、大伽藍を建立しようとお思いになった」の意で、「ムト思フ」と同じく「願望」の「説明」であるが、主語は「宇治殿」「天皇」なので敬語形式が用いられている。

(三) 和文形式の用法

1、「バヤ」の用法

「バヤ」の品詞は希望を表す終助詞とされ、純粹な和文形式である。古事談における「バヤ」は一二例見られ、いずれも会話文または心話文に用いられる。

(34) 又云アハレ無罪配所ノ月ヲ見ハヤ云云(六六頁 一一四七)

(35) アハレ狛人ニミセハヤト被仰ケリ(六七頁 一一四八)

例(34)は「配所の月を見たい」の意、例(35)は「狛人に見せたい」の意で、主語は表面に出ないが一人称である。この用法は「願望」を「表出」するものである。

(36) 白川院御時、女御ノ御坐シケルカ、有智徳行ノ貴僧ヲ供養セハヤト思食テ(三七〇頁 三一〇三)

(37) 父伊成ヲ試ハヤト思テ、或時於塗籠ノ中ニ取合ケリ(五九二頁 六一七二)

例(36)は「女御が、有智徳行の貴僧を供養したいとお思いになって」の意、例(37)は「父は、伊成を試したいと思つて」の意で、主語は「女御」「父」といった三人称である。この用法は「願望」を「説明」するものである。

2、「マホシ」の用法

「マホシ」は希望を表す終助詞であり、「バヤ」と同様純粹な和文形式である。平安時代の和文に多用されたが古事談においてはわずか一例のみで次の会話文に用いられる。

(38) 一旦蘇生セサセテ、念仏ヲモ申テキカセマホシク侍云云(二八七頁 三一三二)

例(38)は「念仏を申して聞かせたい」の意で、「願望」を直接「表出」する用法である。

以上の考察で分かるように、「バヤ」と「マホシ」はどちらも内心の「願望」を「表出」あるいは「説明」するものである。また、このような和文形式は会話文または心話文に用いられていることは、リアルな会話文に内心の希望を表現するには、漢字形式より和文形式の方がよりふさわしいという事情も窺える。

四、おわりに

以上、古事談における希望表現を考察してきた。古事談における希望表現の構成形式には漢字形式、和漢混淆文形式及び和文形式が見られ、量的には漢字形式が種類においても用例数においても遙かに多い。これは出典及び文体と直接関係するものと思われる。

各形式の用法の特徴についていえば、漢字形式には「欲」「願」は助動詞の用法があつて内心の希望を「表出」あるいは「説明」するが、それ以外の漢字形式は主に実動詞用法中心で、内心の希望ではなく、具体的な動作・行動を表す。また、単独で用いられるとともに、他の漢字と熟語化して用いられる用例も多い。

和漢混淆文形式の「ムト思フ」は漢字形式の読み下しともいえるが、和文の語順であり日本語の敬語などが表現できる。

和文形式の「バヤ」と「マホシ」は用例数が漢字形式ほど多くないが、ともに会話文か心話文に使用され、内心の希望を表すものである。

【テキスト及び主要参考文献】

- 川端善明 『古事談』解説（『新日本古典文学大系41 古事談・続古事談』岩波書店 二〇〇五年一月）
- 山田俊雄・馬淵和夫編 『日本の説話7 言葉と表現』（東京美術 昭和四九年一月）
- 浅見和彦・伊東玉美 『新注古事談』（笠間書院 平成二二年一〇月）
- 有賀嘉寿子 『古事談語彙索引』（笠間索引叢刊127 平成二二年一月）

【注】

- (1) 柴田昭二、連仲友 「希望表現の通史的研究 序説」（『香川大学教育学部研究報告』第一部第109号 平成12年3月）。

(2) ここでいう希望表現とは、人の願望に関する、一種の心情的表現形式である。また、その下位分類として、話者自身の動作・状態

に対して向けられるものを「願望表現」、他者の動作・状態に対して向けられるものを「希求表現」と称する。さらに、希望を直接発する場合を希望の「表出」、それ以外の間接的質しや過去などの場合を希望の「説明」と称する。現代日本語においては、「願望」は「たい」の形で、「希求」は「てほしい」の形で表現するのが最も一般的である。したがって、一人称現在形式「一人称したい」「一人称してほしい」はそれぞれ「願望」、「希求」の「表出」であり、一人称の過去「一人称したかった」「一人称してほしかった」、二人称の疑問「二人称したいか」「二人称してほしいか」、三人称の「三人称したがる」などの形式は、「説明」にあたる。

(3) 川端善明『古事談』解説（『新日本古典文学大系41』岩波書店）

(4) 益田勝実『抄録の文芸』（国文学 解釈と鑑賞）昭和四一年二月・三月・四月）

(5) 江談抄、中外抄、富家語のテキストには岩波書店『新日本古典文学大系』を用いる。

(6) 川端善明・荒木浩校注『古事談 続古事談』（新日本古典文学大系41 岩波書店二〇〇五年一月）

(7) 「願望」「希求」及び「表出」「説明」の概念については注(2)参照。

（しばたしろうじ 香川大学教育学部教授）

（れんちゆうゆう 広島市立大学客員研究員）

（二〇一二年五月三十一日受理）